

ドウサ漉入図写紙というのは、ドウサ、つまりニカワとミヨウバンの溶液を混ぜて漉いた薄様紙のことだ。江戸時代までは、浮世絵などでにじみの調整が必要な時、ドウサを紙の表面に刷毛で塗っていた。吉井源太は、塗るのではなく、原料の中に混ぜ込む方法を開発した。

「日本製紙論」によると、この紙は書や画の上において、その形をなぞる、いわゆる透写に使った。

上質な紙であれば、人物の毛髪や花鳥風月の細かい線まで判然とし、明瞭に写すことができる。紙にドウサを入れるのは、原図の墨の線を見やすくすることと、上から描くときに墨汁がしみてしまうことを防ぐためだ。

透明性を増すために少し亜麻仁油を入れても良い。この紙に必要なことは、薄

く漉くこと。また、漉き跡があったり、厚薄があったり、下の絵などが透けて見えにくくなるので注意しなければならない。ドウサの量は、漉く前の準備として特に注意が必要になる。

源太は、欧米ではトレーシングペーパーというものがあるが、非常に高価らしいので、この図写紙を代用品とすることを目指し、ますます改良して全く欠点のないものにしてはけないと勧めている。

この紙の製造の初めは明治十六（一八八三）年ごろだった。「日本製紙論」が出た同三十一（一八九八）年ごろには各地で製造されるようになっていたが、残念ながら製造するというよりは模造している状態だと注意している。

輸出するには質の不十分な紙が多いことを心配していた。たとえば、ドウサの

使い方。紙を製造した後に紙に塗っている産地があった。抄紙技術の進歩していない地方や未熟者がよくやる間違いだ、としている。

ドウサは漉槽の中に前もって混和しておかなければならない。このためには高

度の技術が必要になるが、こうして作ったものでなければとうてい、良質の紙はできない。

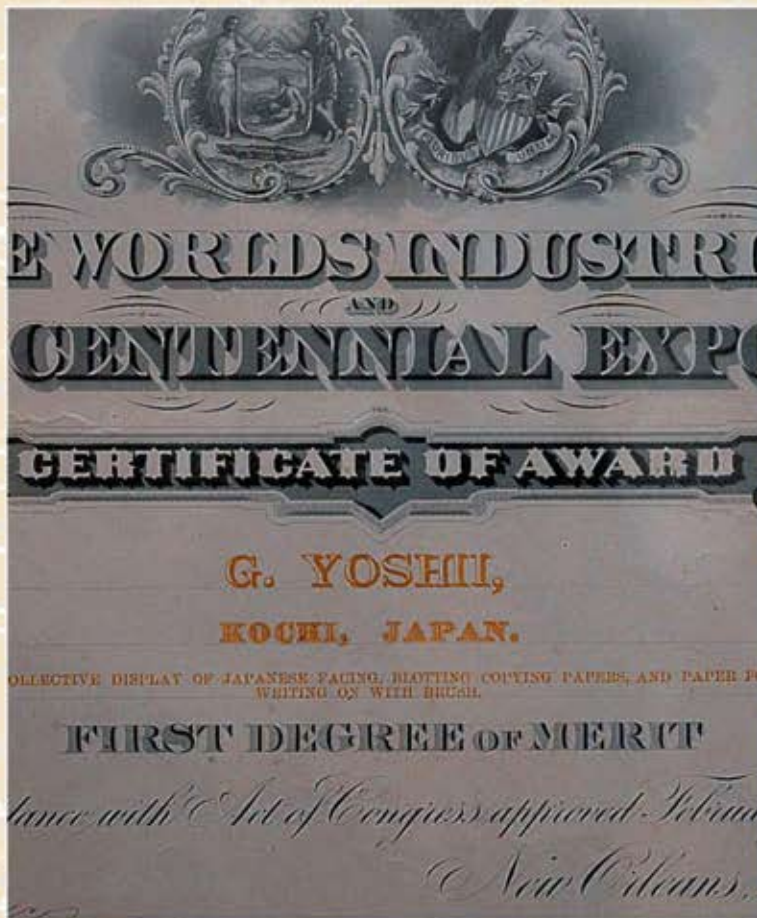
源太は、同十八（一八八五）年にアメリカ合衆国ルイジアナ州ニューオーリンズで開かれた万国博覧会に

この紙を出品した。審査の結果、図写用紙に最適であるとして賞牌を贈られた。海外でその価値を認められた最初である。以後、欧米の各国から注文を受けることになった。

国内では高等女学校や美術学校で必需品となった。

源太は注文の紙を納める時、試作に使ってほしいと、別の紙五枚を同封したことがある。その試作絵のうち一枚を拝領したいと願った。もしかなえば、家の宝にしたいと書いている。

（京大大学院研修員、京都府在住）



ニューオーリンズ万博で吉井源太に贈られた賞状（いの町紙の博物館蔵）

源太は注文の紙を納める時、試作に使ってほしいと、別の紙五枚を同封したことがある。その試作絵のうち一枚を拝領したいと願った。もしかなえば、家の宝にしたいと書いている。

（京大大学院研修員、京都府在住）